

平成 28 年 5 月 19 日

東北公益文科大学

庄内オフィス長 鎌田 剛 様

東北公益文科大学 地（知）の拠点整備事業
外部評価委員会

平成 27 年度外部評価委員会の審議結果について

標記について、貴オフィスから説明のあった内容を審議した結果、貴学の取組みは概ね目標どおりに進展しているものと考えます。

なお、評価の過程で提示された委員からのコメント（別紙）について十分参考の上、今後の取組みを進められるよう要望いたします。

(別紙)

27 年度実施事業に対する外部評価委員コメント (1)

- 非常にたくさんの領域、分野、テーマを掲げているものを、運営のところでしっかり束ねて管理しているのは評価できる。
- カリキュラムは非常に重厚なつくりになっていて、しかも視点を3つに分けて、それぞれに成果を出そうとしているところが評価できる。ただ、新カリキュラムが大学全体のカリキュラムの中で、あるいはCOCとの絡みでどのくらいの真新しさがあるのかがよく分からなかった。また、部会長の報告でたびたび出てきた「上回った」という言葉の意味が、もう少し明確であると良かった。とはいえ、授業アンケートなどをしっかりと行っている点は、先生方の努力の賜物と評価したい。
- 地域リーダー育成は非常に大事で、大学の力の見せどころだと思う。少しずつ結果が出てきているようなので、さらなる成果を期待したい。
- 地域課題基礎研究は、それぞれの研究が一つ一つの評価シートになっているが、研究全体としてどのような成果が出たのかについて、総体的な評価シートがあるとよい。つまり、個々の研究を行ったことで、庄内地域の何がどう変わったのかについての分析を加えてほしい。そうでないと、それぞれの研究がCOC事業に本当の意味で生かすことができたのか、さらに言えば、研究テーマの選択が適切であったかどうかを評価することができない。自分の研究テーマに引き付けて、自分の成果としてだけで終わってしまうようではない。
- アクション・プロジェクトは幅広いので、テーマをすべてカバーしきれなかったのは仕方ないだろう。やはり取り組みやすいテーマ、例えば地域のコミュニティ組織などが中心になるのは当然だ。なお、ここに掲げたプロジェクトが、どういう経緯で立ち上がったのかについての説明が欲しかった。地域ニーズの掘り起しは非常に重要であると考えからだ。

○地域が何を欲している、そこに、大学のシーズをどこまで投入すれば、何がどこまで解決できるのかという見取り図、見通しを持った上で、事業を進めていくことが重要だ。そうでないと、事業費がある間はいいが、事業終了後の継続が困難になる場合も想定される。本当に必要なニーズがあって、こちら側で何ができるかという見極めができることに期待したい。授業（カリキュラム）の中でそういう感覚を育てていくと、継続性が高まるのではないかと思われる。

27年度実施事業に対する外部評価委員コメント (2)

- 地域力の結集ということで、課題共有検討会などを実施したようだが、行政ではどのレベルの方が参加したのか。例えば、トップが出たところはあるのか知りたい。
- 先生方からご指導をいただいて、また学生にも加わってもらい、課題の掘り起しや解決に向けた取り組みが、少しずつ前向きに進んでいる実感がある。その点は大変感謝している。しかし、我々と大学は密に意見交換や情報交換ができていると思うが、それらが行政に十分に伝わっておらず、またボトムアップも成されていない気がする。例えば観光などといった地域課題には、本来、行政も深くかかわるべきだと考えている。
- そこで提案だが、我々は地域課題解決全国フォーラムの実践・研究報告で発表を行っている。その場に、行政のトップなどに加わっていただき、コメンテーターのような立場から、行政としての意見を頂戴したい。ぜひそういう場を設けてほしい。さらに言えば、この事業の中で、いろいろな機会を利用して、行政のトップがコメンテーター的な役割を担えるような工夫をしてもらいたい。
- 学生は非常に頑張っている。若い人が地域に入ってきて熱気が出るのは大変ありがたいことだ。ただ、大学が酒田にあるので、カリキュラムの都合上、鶴岡にはやや距離感を覚えるのも事実である。
- ゼミや演習などで学生が来てくれれば我々もいろいろと話をするが、逆に、ゼミや演習などに我々を呼んでもらって、ディスカッションを通じてさらに課題を掘り下げるような機会があってもいいと思う。報告の中で、学生の地域への関心が高まっているというのは嬉しいことだ。ぜひ地域の人をうまく使ってもらい、我々も何がしかのお手伝いができればありがたい。

○この事業には、地域貢献の一環で、地域に人材を輩出する意味もあると思う。
したがって、例えば卒業生の何割かは庄内に残るようにするなど、何らかの
数値目標があつて、それに対してどのくらい目標が達成できたのかという評
価もまた数値化すると、地域で育った人材を地域に輩出するという目的が明
確になると考えられる。

27年度実施事業に対する外部評価委員コメント (3)

- 地域を回っていると、多くの住民から、地域の人口減少や少子高齢化などが進んでいく中で、自分たちで助け合っていく、支え合っていく仕掛けや仕組みを作らなければならない、という意識が芽生えてきているのを感じる。しかし一方で、地域から人がどんどんいなくなるところでは、どうやって地域で活動する人材を確保していくかが大きな関心事である。その意味で、地域リーダー育成の観点から、小中高生、いわば将来的に地域を支えていく人材を育成していくと報告があったが、できれば即戦力の育成にも注力していただきたい。例えば、社会人を対象としたセミナーなどが求められよう。
- 人材育成に関して加えるならば、主体的なコミュニティ組織を構築する上で、地縁的な活動に関わる人材を育成することは重要であるが、同時に、市全域、あるいは庄内全域に関わるような活動をする人材も育成していく必要があるだろう。
- 私たちが暮らしている庄内地域をはじめ、地方の地域社会では、人口減少、少子高齢化、過疎化などに伴うさまざまな地域課題が顕在化している。そうした状況の中、地域課題の解決を目指す日本地域課題解決学研究会が設立され、また地域課題解決全国フォーラムが庄内地域で開催されることは、まさに、時宜に合ったものである。この両者の活動が充実し、多様な取り組みの実践例とその課題・成果などが蓄積されていくことで、課題解決のための多くの引き出しを有する「庄内モデル」の発信につながることを期待したい。
- 地域包括ケアシステムを構築するためには、地域住民を担い手とする生活支援サービスを創出・提供できるかどうかの一つのカギになっている。このことは、地域コミュニティをフィールドに展開される可能性が高いことから、主体的なコミュニティづくりを進めるうえでの人材育成とも、密接に関連するはずである。相互の課題や目的を総合して進めていただきたい。
- 酒田市宮野浦学区におけるアクション・プロジェクトについて、評価シートでは、次年度(28年度)は「…小地域ごとに『住民同士の課題共有と対話の促進』のための場づくりを、地域と協力して実施していきたい…」と述べてい

る。「場づくり」にあたっては、酒田市福祉課と酒田市社会福祉協議会も連携・協力したいと考えているので、ぜひお声をかけていただきたい。

○評価シート「目的」欄の記載が分かりにくい。全体として文章表記になっているためか、最後まで読まないで目的を把握することができない例が見受けられる。本質部分を箇条書きで明示し、他は補足的に表記することは考えられないか。

以上